

シンポジウム2

輸血を受けた患者様の声を集める取り組み：医薬情報担当者として

小田秀隆、糸田知身、黒木敬介、下河 真、松崎浩史(福岡県赤十字血液センター)

【はじめに】

血液事業は献血者の善意によって得られた血液を輸血用血液製剤として、輸血を必要とする患者様の待つ医療機関に“必要な時”に“必要な量”を“安定的”に届けることである。医療機関で輸血を受ける患者様はベッドの上で、血液を提供してくれた献血者に感謝しているだろう。福岡県赤十字血液センター（以下、福岡センター）では、輸血を受けた患者様の感謝の声を継続的に収集し、それを献血者に届ける方法として「ありがとうの手紙」と「ありがとうのポスト」を作成し、医療機関と連携することを企画した。

【方法および結果】

患者様の声を集める取り組みは、多くの赤十字血液センター（以下、血液センター）が実施しているが、その現状が調査された報告はない。そこで、全国の血液センターにアンケートを行ったところ、30血液センターから回答をいただいた（回収率64%）。アンケートの設問と回答結果は以下のとおりである。

設問1：輸血を受けた患者様の声の収集について
結果：30施設のうち22施設（73.3%）が患者様の声を収集したことがあり、そのうち14施設が継続して収集を行っていた。

設問2：患者様の声の収集方法について
結果：患者様の声を収集する依頼先は病院長が26.2%，診療科医師が33.3%，患者様本人や家族が16.7%，その他（ポスター、チラシ、ラジオ、Twitter、患者会、院内学級、骨髓バンク広報誌、医療機関の検査部門、看護部門、輸血療法委員会）であった。

設問3：患者様の声の利用方法について
結果：患者様の声を掲載したチラシを作製し、移

動採血車や献血ルームで掲示や配布、献血セミナーやボランティアキャンペーンで紹介、医療機関での輸血説明会や合同輸血療法委員会での紹介、血液センター作成の広報誌に掲載、献血協力企業や団体等への配布、県市町村ホームページやFMラジオでの広報、Facebookでの公開、処遇品とともに献血者へ配布などであった。

設問4：チラシや掲示物の内容更新について

結果：患者様の声の更新時期は定期が22.7%，不定期が50.0%であったが、更新されていないとの回答もあった。

設問5：問題点や今後の課題等

結果：患者様や家族の声を効率的かつ継続的に収集する方法があると良い、患者様のプライバシーをどのように保護するか、収集した声の利用方法。収集できる患者様や家族の声は決して多くないため、全国の血液センターで収集した声を共有できればよい等の意見があった。

以上のことを踏まえ、医薬情報担当者が行った福岡センターの取り組みを紹介する。

1. 患者様の声の収集方法

「ありがとうの手紙」を投函する「ありがとうのポスト」を作成し、医療機関に設置していただいた（図1）。「ありがとうのポスト」を設置する医療機関は、血液製剤使用量の多い三次救急指定医療機関とした。「手紙」の回収数がどれほどになるか予想できなかったので、「ポスト」の設置は試みに3施設とした。

当該医療機関への本企画の説明と協力依頼は段階的に行った。まず、日ごろの訪問で協力いただいている医師、看護師、臨床検査技師などに趣旨説明を行った。説明内容は、①「ありがとうの手紙」と「ありがとうのポスト」の目的、②福岡県における



図1 ありがとうのポスト(久留米大学病院)

る献血者数などの献血状況、③当該医療機関の血液製剤供給状況である。

次いで、輸血療法委員会での説明許可を得るため、輸血責任医師、輸血責任臨床検査技師に同様の趣旨説明を行った。輸血療法委員会でも同様の説明を行い、委員の診療科医師、病棟看護師、事務職員の意見や要望を参考に「ありがとうのポスト」の設置診療科を決定した。その後、当該診療科医長、看護部、事務部への趣旨説明を行い、最後に病院長あてに「ありがとうの手紙」募集の協力依頼文書を提出した。

当該診療科病棟では「ありがとうのポスト」の設置場所、数、メッセージカードの記入方法および回収時期と方法等について病棟医長、病棟看護師長、輸血責任臨床検査技師と打ち合わせを行い、「ありがとうのポスト」の設置となった。

2. 「ありがとうの手紙」の利用方法

いただいた感謝の声は短くも、心に沁みるものであった(図2)。「ありがとうの手紙」は定期的に回収し、その一部は福岡センターの広報誌である「ハッピークロス」に掲載して献血者にお渡しして

いる。

【考 察】

アンケートによって、約半数の血液センターがそれに創意工夫を凝らした取り組みを行って輸血を受けた患者様や家族の声を収集していることが分かった。一方、多くの血液センターでは患者様の声の収集に苦労しており、その取り組みは単発的で終わっていることも分かった。

今回、日ごろの病院訪問で築いた信頼関係とともに、血液センターと医療機関が連携して輸血を受けた患者様の声を継続的に収集する方法を検討した。これらの作業に関与したいずれの医療機関の方々からも賛意と協力が得られた。

献血は非対面式のボランティア活動であり¹⁾、献血者は自分の行為が役に立っていることを直接知ることができない。患者様や家族の感謝の声を集め目的は、献血者の方々に患者様の感謝の気持ちを伝えることであって、輸血を必要とする患者様のことを伝えて献血をお願いする献血推進と似てはいるが、異なるものであることを忘れてはならないだろう。

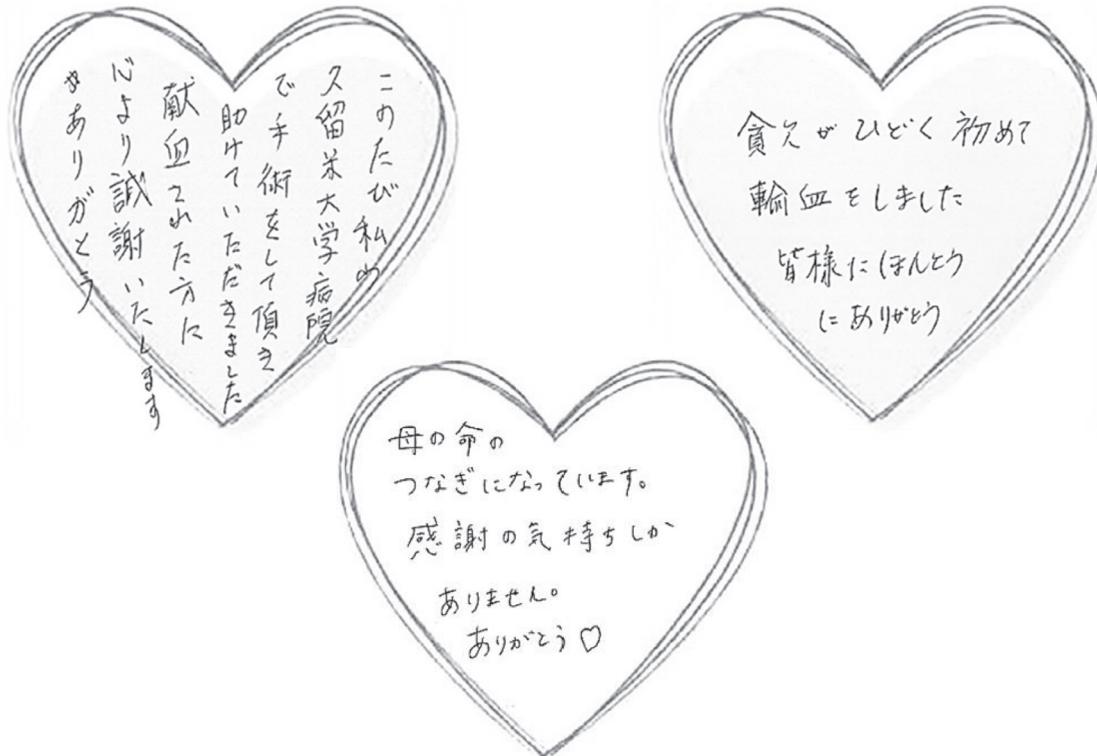


図2 ありがとうの手紙

文 献

1) 奥村泰成, 他: 社会経済的インセティブは献血意

欲を増加させるか～献血行動に関する実証分析～,
WEST論文研究発表会 2013.